

健康文化

ドライアイも病気のうち

前越 久

朝、目が覚めたとき自力で瞼を開くことが出来ない、というようなご経験はありませんか？ 私は、昨年11月頃からその症状が特にひどくなり、指であかんべーをするような格好で下瞼を下に引っ張るようにして目を開けねばならないことがしばしば起るようになった。その時、大げさな表現になるかもしれないが、バリバリと音がするような感触がして瞼が開く。角膜が内瞼にくっついて破れるのではないかと思うくらいである。冬季の乾燥している時期なのでこうなるのであろうか、涙腺の働きが悪くなったためなのか、とか、69才という年齢から瞼の開け閉めの力が衰えたためなのか、などと自己診断をしながらしばらくは放置しておいた。しかし、本当に角膜損傷で目が見えなくなっても困ると思い、昨年11月の中旬頃、某総合病院の眼科を訪れた。

例により、視力検査、眼圧測定の後、診察室に入る。眼科は女医さんが多い。この病院もやはり女医さんであった。暗室で光を投射しながら、眼球を上下左右に動かしながら眼球の診察をし、点眼薬を差して涙の出具合などを調べていたらしい。ほんの3分ほどの診察で、角膜に傷はついていない、涙の出具合は少し悪いようだ、との診察で、点眼薬を処方して様子見ということになった。点眼薬は人工涙液マイティア／5mL（2本、2週間分）であり、定期的の点眼ではなく、目が乾いたと感ずる時に適宜点眼するというものである。薬の説明書には、「涙が少なく目が乾くときに涙液を補給する」と記載されていた。今まで、目薬を差した経験がほとんどなかったので、朝、目覚めて左眼、右眼に点眼することは困難な作業であった。枕元にあらかじめ用意しておいた点眼薬を手探りで取り、瞼を閉じたまま、点眼薬を目に命中させることはかなり難しい。点眼薬の説明書に、点眼する場合に「容器の先端が目と直接接触しないように」との注意書きがあったからなおさらである。上下の瞼の間にうまく薬液が滴下できたと感じたとき、目をつむったまま眼球をぐるぐる回すしぐさをするにより眼球の表面がなんとなく潤い、自力で瞼を開けることができるようになる。やっかいなことである。

1ヶ月後の12月中旬頃、あまり軽快した様子が感じられなかったため、再

度受診し、同じ医師にその旨を伝えた。医師は、それでは薬を変えてみましょうと言って、ヒアレイン 0.1/5mL（2本、2週間分）を処方してくれた。1日4回、両目に点眼するようにとの指示であった。思い切って、「これは涙が良く出るようになる薬ですか？」と問うてみた。医師は、「目を潤すための薬だ」との返答であった。持ち帰った薬の説明書にも確かに、「目の乾燥を防いだり、保護します」と書かれていた。また、点眼薬の容器には、角結膜上皮障害治療用点眼剤（有効成分：ヒアルロン酸ナトリウム点眼剤）と記載してあり、涙腺の機能回復を狙った薬ではないようであった。

上記のような点眼薬では、根本的な治療にはつながらないと素人判断し、失礼ながら眼科専門病院に代わってみることにした。以前、家内が白内障の手術をして頂き、軽快した病院である。やはり、視力検査と眼圧測定の後、診察室に入った。男性の医師であった。暗室で検眼器による診察の後、「角膜に傷はない。涙の出が少し悪いようだ。視力も十分（両眼とも1.2）なので大丈夫でしょう。目薬を出しておくから差してみてください。」と言って、アイケア 0.1/5mL（2本）を処方してくれた。この点眼薬容器表面には、上記ヒアレインとは薬の名前は違うが、角結膜上皮障害治療用点眼剤（有効成分：ヒアルロン酸ナトリウム点眼剤）と記載されており、全く同じ薬であった。結果的に、セカンドオピニオンも同意見ということになり安心したり、失望したり……。

どちらの眼科診察室の前にも、目の病気に関するパンフレットが置かれており無料で頂戴できる。パンフレットの表題をみて「涙の話・気になるドライアイ」、「知らなかったドライアイ・ドライアイを理解するために」、「角膜感染症」の3冊を頂いて帰った。主な記述を紹介すると、『ドライアイ』とは、涙の量が減ったり、涙の成分が変わってしまうことで、目が乾き、角膜や結膜に障害がおこる疾患であること。ほおっておくと、視力が低下したり、目が疲れやすくなること。目が乾いて重症になると目の表面に無数の傷がついてくることがあり、傷から細菌が入り込んで目全体が感染したり、傷が深くなって視力低下を引き起こす。などの説明があった。

黒柳徹子のTVコマーシャルで、「長い人生、病気の一つや二つはあるのが当たり前」というのがある。ドライアイも病気の一つ、ほおっておくと重大な病気につながる。せいぜい涙をさそうTVドラマでも見て、涙腺の老化防止に努めることにしよう。（平成17年6月10日記）

（名古屋大学名誉教授）